

自然体験活動における意思決定と危機管理

Decision Making and Risk Management of Outdoor Activities in School Education

村越 真

Shin MURAKOSHI

1. 緒言

子どもが被害者となる度重なる事件の発生によって、学校での危機管理が今日ほど強く意識された時代はない。雑誌検索のマガジンプラスで「学校教育」「危機管理」というキーワードで検索すると、池田小学校の事件があった2001年より後、毎年20ないし40件程度の記事がヒットする。これは1990年代の同キーワードを含む記事数が、概ね年平均10件程度であるのとは対照的である。また、書籍の検索でも学校の危機管理をタイトルに掲げた本は多く、アマゾンコムの検索では同キーワードで27冊がヒットする。その多くが2001年以降に出版された本である。

こうした本が扱う危機は様々である。もっとも網羅的な事典である「学校の危機管理」(下村,1997)では学校での危機、約500事例が紹介されているが、その内容は日常的な学校経営で発生する父母等からのクレーム、生徒の問題行動やそれに関する指導、教育活動に伴う事故や教職員の非日常的な逸脱行動や勤務上の問題まで多様であり、学校教育における危機領域の幅広さを見てとることができる。危機領域の中で多くの本に取り上げられているのが、外部の犯罪者によって発生する危機である。これらは一般に重大な結果をもたらし、ニュースになりやすい。また、近年学校内あるいは登下校途上の児童への加害が相次いだことより、社会的な関心も高い。しかしこうした事件による被害は、非日常的なものである。その一方で、学校の管理下では年間100万件にも上る日常的な傷害事故が発生しており(日本体育・学校健康センター、1999)、数十人が死亡、数百人に障害が残っている(日本体育・学校健康センター、2000)。これらは、その日常性ゆえに話題に上ることは少ないが、事故に遭い、けがをする児童・生徒の数を考えれば、学校教育において真っ先に危機管理の対象となるべき問題領域といえるだろう。

教育活動に伴う事故の危機管理を考えるとときに考慮が必要なのは、危機を生み出す状況とその教育的な意義が、表裏一体である場合が少なくない点である。たとえば跳び箱には捻挫や骨折のリスクがあるが、それは跳べない者がいたり、跳ぶように努力する過程に失敗があるからである。それが反面、跳び箱を教材として意義あるものになっている。あるいは自然体験活動の意義は、困難の克服を要求する自然環境やそこでの一面不便な生活に多くを負っているが、それは同時に予期せぬ事故の遠因となることもありえる。実際、4泊5日以上長期にわたる自然体験プログラムに対する調査(井上、1999)によれば、参加者に対するけがの発生数は10%程度にも上る。また村越(2005)によれば、2泊3日の小学校の自然体験では、一人平均1.8件のヒヤリハット事例が発生しているが、その多くは、飯ごう炊飯や登山のように、児童の自

主的・実践的取り組みを促したり、努力による克服を要求するプログラムである。このように、体験的活動では、「危険」と「教育的意義」がいずれも活動にある困難さや不確実さから派生している。事故を防ぎ、子どもを守ることは教育関係者の義務ではあるが、危機の発生要因だからといって排除ができない場合が多く、また社会的にも、「危険の同意」（伊藤・佐藤、1995）として許容されている。教育活動に伴う事故には、本質的にこのようなジレンマがある。重大な事故において、しばしば「・・・しておけば」「・・・さえしなければ」といった、最終的な判断・行動の問題が指摘されることも多いが、「判断ミス」も、ジレンマの存在を抜きに評価することはできないであろう。

本研究は、このような問題意識に立ち、教育に携わるものが「危険」と「教育的意義」というジレンマをどう捉え、その中でどんな判断を下すのかを把握すること、それによって教育活動に伴う事故の危機管理を考える手がかりを得ることを目的に行われた。

2. 予備調査

2. 1 方法

素材

本調査で素材として取り上げたのは、2001年6月に岐阜県板取村で起こった春日井市S中学校の自然体験活動における落石事故である。この事故の詳細は資料1の通りである。山岳での落石やそれによる死傷事故は珍しくないものの、学校での活動中の落石による死亡事故は珍しい。また当日は、朝の時点では引率にあたる森林組合との協議により雨天中止を決定したハイキングを、独自の判断で実施したことによる事故であったため、新聞等でも大きく報道される事故となった。しかしながら、梅雨時に行われる自然体験活動では、雨だからといって必ずしも屋外活動が中止になるわけではなく、悪条件の中に思い出に残る体験ができることもある。また事故の起こった場所は、毎年の活動で利用されている林道であり、その意味で特段危険なハザードがあるわけでもない。また、この事故については、事故が起こった3ヶ月後に著者が同村を訪れ、現地の関係者等にも聞き取り調査を行っており、詳細な資料を持っていた。以上の理由から、自然体験活動の危険と教育的意義のジレンマ事例として適切であり、一般化できると考え、素材として取り上げた。

対象者 データ収集の対象となったのは、静岡大学教育学部の3年生である。データ収集は、教職の必修として開講されている特別活動論において、体験的活動の危険について考える授業の一環として、3-4名のグループで実施された。

手続き 自然体験活動の安全に関する判断の演習という名目で行われた。まず、「仮想」の事例について説明しながら、いくつかの判断を下してもらうという大まかな課題の説明をした後、事例の説明に入り、その途中提示される4回意思決定場面に対して、グループで意思決定をしてもらい、判断と理由を各自で用紙に記入してもらった。説明の際には、現地の写真やキャンプ場の様子などを提示し、現実感を高めた（資料2）。学生は全般に意欲的に課題に取り組んでいた。

1) 意思決定場面1

「中学2年約280人を対象に、生きる力を養い協調性を高めるのに最適な2泊3日の集団での自然体験活動を本年あらたに実施することになった。しかし、保護者の中には、行事が増える」とゆとりがなくなる、自然体験活動では思わぬ事故が怖いので、反対する声もある。」という

設定を提示し、それに対して、対象者が担当の教師であつたら、どのような判断を下すかとその理由を明らかにすることを求めた。

2) 意思決定場面2

「この体験活動をやる時期としていつがよいかを考えてください」の判断を求めた。

3) 意思決定場面3

「この体験活動を6月の初旬に行うことになった。2日目の選択プログラムでは、草木染め(40) そば打ち(40)、クラフト(30)、五平餅づくり(30)、林業体験(40)、農業体験(40)、鱒釣り(40)、登山(40)、ハイキング(短い)(40)、河原の清掃ボラ(40)。()内は収容可能人数。いずれも地元森林組合が引率または指導)がある。」という設定のもとで、雨天も予想されるが、それに備えてどうするかについて判断を求めた。

4) 意思決定場面4

「初日到着後雨が降り出し、キャンプファイアは中止となった。二日目の朝も雨が降っていた。6時に地元の森林組合と協議の結果、滑落の危険があるので、ハイキングは中止することになった。雨天でもできるプログラムに生徒を移したが、約100人がスケッチをすることになった。しかし9時ごろには、雨はほとんど降っていない。途中の林道の滝までなら滑落もなく、そこまでのハイキングをしようと提案する先生がいた。」という設定を示し、担当の教員になったことを想定し、どのような判断を下すか、またその理由を問うた。

2. 2 結果と考察

対象者が行った意思決定は4回であるが、このうち本論文の関心の対象である危険と教育的意義のジレンマに関する意思決定場面1と、現場でのジレンマ状況での判断である意思決定場面4について取り上げ、結果を示す。

1) 自然体験活動についての考え方(表1)

学校が新たに自然体験を行うことに対して、保護者が事故に対して不安を持っているという設定に対して、1グループを除く全グループが自然体験活動をやる方向で話を進めると答えた。その主な理由としては、「普段学校ではできない活動であり、協調性などを養うよい機会」「自然の中での危険な経験をして、自然の厳しさを学ぶ」といった、ジレンマとしての捉えをしていた。「こんなこといっていたら何もできない」「災害なんて学校にいても起こりえる。そんなのを怖がるよりも学校だけでは学べないことを学べる活動を行うべき」という意見もあった。

2) 当日朝の計画変更(表2)

朝6時にはいったん中止したはずのハイキングを、計画変更してやるかどうかの判断と理由が表2である。「実施」が4組、「条件付実施」が11組、「実施しない」が4組であった。「実施」の理由としては、外(自然)に触れる機会をできるだけ作りたいというのが比較的多く、「スケッチだけではつまらない」が2であった。「条件付実施」では、「希望」「生徒の意思を聞く」の他、地元の人や教員自身が実際に確認、状態が悪いことが途中で分かれば、そこで判断すればよいというものが多かった。また「実施しない」では、「専門家の意見が必要」「教員の責任になる」「万が一」といった理由が挙げられた。

事事故例の詳細な状況説明を受けたにもかかわらず、8割近いグループが「実施」ないしは「条件付実施」という判断を下した。実際の事故でも、「せっかくだから(雨天用に用意したスケッチではなく)屋外体験させたい」と担当教員が考えたことが実施の直接の理由となっていたが、同様の理由を挙げた学生も2組いた。教育的意義への意識がジレンマに対する判断の

バランスを崩したと考えることができるだろう。似たようなことは、「条件付実施」に付与された条件からも推測することができる。「生徒の希望による」を条件に挙げたグループが5グループあったが、生徒の希望を取ることは、行為やその結果への納得にはつながるかもしれないが、それ自体が事故を防ぐ手段となるわけではない。当該事故の教員の判断は決して特殊なものではなく、同じようなジレンマ場面に遭遇した他の教員集団も、教育的意義を意識するがゆえに、同様な判断を下す可能性は決して低くないといえるだろう。

付された条件の多くは危険を回避するための具体的手段だったが、それが実効あるものかどうかという点でも疑問が残る。現地の安全を実際に確かめたり、地元の人に確認をとるといった危険回避手段が示されたが、本事例の事故発生の経緯を考えると、「下見」や「地元の人との相談」で事故が回避できたという保証はない。なぜなら、落石はある一時の出来事であり、下見時に岩盤が崩落しそうであることを予測することはかなり難しかったと思われる。また地元の専門家も、滑落の危険は想定していたものの、落石による事故は想定外であった（村越、2002、p.63）。したがって、付された条件をクリアするだけでは、事故を確実に防ぐことはできなかったものと考えられる。

表1：自然体験活動を導入するかどうかについての学生の判断

導入	理 由
○	中学生なら危険を見極める力を備えているはずだから。協調性を養うためにも必要／事前に下見などで確認しておけばよい、マニュアルを作ればよい
○	災害は自然の中での活動以外でも大いに起こりうる。それをどう回避するかを身をもって体験するためにも必要／家庭ではそういうところに行かないから、せめて学校では経験させたい。
○	災害なんて学校にいても起こりえる。そんなのを怖がるよりも学校だけでは学べないことを学べる活動を行うべき
○	自然に触れる機会が少ないし、集団行動で協調性を高めるため
○	生徒が楽しめる。自然の中で集団生活することで新たな発見をする。外の世界を知る。災害を恐れていたなら、何もできない。実体験が必要。協調性をはぐくむ
○	グループで協力することが多い。エコに興味を持つきっかけになる。生きる力を作る。学校から離れることによっていいガス抜きになる。
○	災害は怖いけど、もしものときの対応を学ぶことも大切。違う環境になることで協調性が高まる
○	保護者に対する理解を求める。安全配慮、予防対策
○	安全に対する配慮を教師側がしっかりすることにより、保護者に安心させる。協調性は体験的活動を通してより学ぶことができる。自然災害を学ぶ場になる
○	自然が少なくなっているのだから、豊かな自然と触れ合って、自然を大切にすることを育てる。聞き能力を上げる。集団行動のルールやマナーを覚える
○	小学校のときの視点と違った中学生の視点で自然を見たり体験し、集団活動をしていく。自然を体験することが少ないので、このような機会を設けていくことは大切
○	普段の生活では体験できない。危険を経験するためにも大切
○	最近の子どもたちは自然と触れ合う機会がない。災害が怖い→どこにいても同じ。危険を回避する能力を身に着ける
○	自然体験活動を通して、自然に対する意識の高まりなど得るものは大きい
○	自然の中で危険な経験をして、自然の厳しさを学ぶ
○	いい思い出になる。教員や大人の人数を増やして予防対策を強化すればよい。こんなこと言っていたら何もできない
○	普段とは違う環境で協調性が高められる。そもそも安全配慮ができていれば行すべき
○	学校の授業以外でしか学べないことも学び思い出を作ったほうがよい。生きる力を養える
○	野外に出たほうが気分転換になる。普段と違う環境で新しい経験も増える
○	危険は伴うけれど、危険にならないように下準備をしていく
○	思い出になる。たくましくなる
○	事前に保護者に行く場所や詳しいことを説明しておけばよい。引率を増やし、安全であることを強調する。事前に危険予測等することで心構えをしておけば大丈夫。危険危険といったら何を行うにしても危険になってしまう。どう対処するかを養うこともできると思う。安全な場所だけでは学べない
×	もっと安全性のある他の体験活動を行う。

表2：ハイキングを実施するかどうかについての学生の判断

実施	理 由
×	山の天気はころころかわる。地盤が緩んでいたりと、水かさがましったりする時があり、危険
△	安全なところまでのハイキングを決行する。何もせずかえるのはつらすぎる。少しいってみて、もしも状態が悪いと判断された時点で引き返すのも可能
○	スケッチでは面白くないし、せっかくなのだし
×	教員側の責任が問われる。また事故も起きてしまう。
○	雨上がりは晴れのときは違った表情が見える。降ったら降ったとき、かえってくる。滝までいなくても外へ出よう
×	森林組合の人と連絡をとらずに決定はまずい。専門家の意見も必要。帰りに雨がまた降ってくる可能性がある。
△	自然に触れ合う機会がなかったから。しかし生徒の希望をとって、スケッチを続けたい生徒には続けてもらう
△	生徒の意思をみつつ判断する
△	地元の人と連絡をとり、安全性を確かめてから安全なら行くべき
?	外に出てスケッチをする
△	希望する生徒がいたら、その生徒だけ滝に行く（地元の人が大丈夫といえばの話）その生徒の人数に合わせて、先生と一緒にいく。
△	林道ではなくバンガロー周辺を歩く。本当に安全かが心配／やる：生徒が行く前に先生が事前に行って確かめる（両論併記）
△	9時の時点でもう一度森林組合の方と協議をし、林道の滝までいくことが危険でないことを確認していくことを決める
△	再度、地元の森林組合の人と協議し、危険がなければハイキング実施。組合の人は教員よりも詳しい。生徒の意見を聞く。参加者の意思を優先すべき。実施になったら100人をグループ分けし、少人数ずつ実施。残りはスケッチ
△	前日の雨の量が多い場合：危険性があるので中止、少ない場合：森林組合と相談した上で決定
△	でも最初に生徒の意見も聞く。スケッチにはまっている子もいるかも。安全と判断できるならば、せっかく来ているのだから行くべき。雨の中の自然もいいかも
×	危険性が非常に高いため。万一のことを考えると中止せざるを得ない
○	子どもたちが自然に触れるいい機会を作ったほうがよい
△	スケッチだけではつまらない。団体行動や協調性はスケッチだけでは生まれにくい。危険がない場所まで必ず引き返してくる
△	危険因子が少ないのだから、せっかくの機会だし、いくべき。でも怖くていきたくないという生徒が出てくる可能性があるから、「行ってみたい」という生徒だけを連れていき、残ったものがスケッチを続けるのはよいと思う。
△	森林組合の人に連絡をとり、OKが出たらハイキングを行う（安全が確認できたら）。林道なら安全では。生徒に聞いてみる。やりたい人とやりたくない人で分かれてしまってもよい。
△	スケッチで帰るのはかわいそう。どういう風に危険が起こらないようにするかを行う前に生徒に伝えて、みんなで注意しながら自然を楽しむ。十分な引率者を備えて、みんなで気をつけながらいけば大丈夫。
△	生徒がかawaiiそう。事前に教師が様子を見てから

○：実施 △：条件付実施 ×：実施しない

3. 本調査

予備調査では、まだ教職経験のない学生を対象にジレンマ状況での判断を検討したが、同種の判断を日ごろから要求される現職教員でも、同様な判断を行うのであろうか。本調査はこの点を確認するために行われた。

3. 1 方法

対象者 データ収集の対象となったのは、静岡大学教育学研究科大学院に在籍する現職教員6名である。個別に依頼して対象者となってもらった。

手続き 自然体験活動の安全に関する意識を調査するという名目で行われた。まず、仮想の事例について説明しながら、いくつかの意思決定を行ってもらおうという大まかな課題の説明をした後、事例の説明に入った。意思決定場面は場面2を除く3つが与えられた。また詳細な状況を把握し、場面に対するイメージを喚起するよう、現地の地図やキャンプ場、林道の様子を写真で提示した。なおすべての意思決定をした後、提示した事例で思い当たる事件がないかどうかを質問したが、思い当たると答えた被験者はいな

かった。最後に、このシナリオが、場面1を除き、実際にあったことほぼそのままであったことを説明し、調査を終えた。調査は概ね15から20分の時間であった。設問に対する判断とその理由は口頭で述べられ、すべてICレコーダーで記録され、テキスト化したものを資料として利用した。

3. 2 結果

本論文の興味の対象である自然体験活動の危険と教育的意義に関するジレンマに関する場面1と場面4について取り上げ、結果を示す。

1) 自然体験活動についての考え方(表3)

学校が新たに自然体験を行うことに対して、保護者が不安を持っているという設定であったが、全被験者が、自然体験活動をやる方向で話を進めると答えた。自主性や協調性、自然の中での体験の意義を、実施の主な理由としていた。保護者の不安に対する安全確保については、学生よりも具体的な記述がみられる。また保護者に対する説明に関しても、「学年便り」「保護者会での説明」など、大学生よりは具体的な対応策を指摘する傾向が見られた。危険そのものについては「事前に下見などで確認しておけばよい」「教員や大人の人数を増やして予防対策を強化すればよい」というふうに、配慮と事前準備などのリスクマネジメントによって事故の予防は可能であり、また保護者の理解も得られるという意見が多かった。

全体として、保護者への説明責任や対処といった点での危機管理は学生より詳細で具体的であるが、リスクそのもののマネジメントという点では、大学生の回答と大きな違いはない印象を受ける。

2) 当日朝の計画変更(表4)

朝6時にはいったん中止したはずのハイキングを、計画変更してやるかどうかという意思決定については、学生よりも慎重な判断がなされる傾向にあった。「実施」と答えた対象者はおらず、条件付実施が4、実施しないが2名であった。条件付実施で挙げられた条件としては、「安全確認」「森林組合との協議」が大勢を占め、この点の判断は学生と大きな違いはなかった。ただし学生とは違って、「生徒の希望」によるものはなかった。「実施しない」と答えた教員のうち1名は、その理由を写真の状況などにも言及しながら、次のように詳細に説明している。

一度決定したことに、教師や生徒達でもし決めてしまうとしたら、それは危険。生徒にいくら「先生行こうよ」といわれても、やめた方がいい。これみても、雨が降らなくてもこう、なんか石ころがこう、土砂崩れとかやっぱり落ちてきそうな、雰囲気がある。

4. 全体的考察

1) ジレンマ状況とそこでの判断

学生に比較して、現職教員の方が危険回避的な判断が多かったが、いずれのグループともに、雨中のハイキングを「実施しない」と答えた対象者は少数派であった。また、実施のために挙げられた条件の面では、学生・現職教員ともに下見・専門家へのアドバイスによる安全確保が中心であったものの、生徒の意見を参考にするという条件が学生には見られた。教育的意義と危険というジレンマ状況で、学生はより危険側にシフトした意思決定を行っているが、これは活動の教育的意義を強く意識していることが大きな要因だと思われる。近年学校教員の間で、

「子どもの目線に立つ」ということがしばしば言われるが、「子どもの目線に立つ」ことは、危機管理という視点から見ると、リスクな意思決定につながる可能性は否定できない。児童・生徒に対する危機管理者であるというもう一つの教員の役割について、教員養成の中でもっと強調される必要があるだろう。

表3：自然体験活動を導入するかどうかについての教員の判断

実施	理 由
○	当然事故とかは考えられるが、それをいつたならにも出来ない部分もあるので、事前に職員で行って危険を把握し、大丈夫だって言うことをとらえた上での説明会を行う。
○	安全対策については、事前指導、生徒に注意事項を言うとともに、あと、引率する人の体制を整える。施設に行くのであれば、施設の方の協力も得て、スタッフを充実させる。
○	医療機関だとか救急法などの体制を整えて
○	保護者の中でボランティアとかを依頼する、緊急時の対策を立てる、何か起きたときに病院へ搬送する手段などを確立
○	計画の段階の保護者への説明、危機管理的な部分の予測した中での計画の方をしっかりとる。
○	意義などを学年便りなど、また一学期の間に……一度参観日・参観会などを利用して、事前に説明を行う。

表4：ハイキングを実施するかどうかについての教員の判断

実施	理 由
△	教員が複数の目で実際にコースを走りながら確認する。
△	途中晴れてきても、それまでの準備が出来ないので、この（元の）計画で行く。
△	きちんと打ち合わせの元に対応でき、共通理解がもてるなら可能。 雨の状況と土の状況を地元の人に確認し、中学生が出来ることを確認。
×	初日も降って、朝も降って、相当の雨量があるので、その時は降っていなくても、増水等の危険があるので。
△	気象情報、地元の森林組合の方と情報交換などをして、確実に安全を確保できるなら、途中まででも行きたい。 地元の森林組合に先発隊でルートの安全を確認してもらう。
△	森林組合に相談をし、車で道の安全点検をする。 全く計画が変わるわけではないので、途中までとか、距離を短くしたという判断であれば、いいというふうにしますので、その辺、しかも、雨天の為縮小したという形の中で実施の方は考えたい。
×	一度決定したことに、教師や生徒達でもし決めてしまうとしたら、それは危険。生徒にいくら「先生行こうよ」といわれても、やめた方がいい。これみても、雨が降らなくてもこう、なんか石ころがこう、土砂崩れとか？ やっぱり落ちてきそうな、雰囲気がある、林道なので。

現職教員の挙げた条件は、全般に学生よりも具体的な安全確保策が挙げられていたが、その多くが自然体験活動において安全を確保する上で、本当に有効なものであるかという点については検討の余地がある。「予定を安易に変更しない」「下見」が、それだけでは安全確保を意味しないことは、通常の状況下で事故が皆無ではないことから分かる。確かに、これらの条件を満たすことは、事故が発生したときの「説明責任」を全うすることになるという意味で、クライシスマネジメントにはなっているが、それによって事故を完全に防ぎうるわけではないし、リスクがゼロになるわけではない。本調査だけでは十分に明らかではないものの、体験的活動の中にはリスクが不可避に存在することが十分意識されているかどうかについては疑問が残る。

2) 事故防止への示唆

事故につながる意思決定が、多くの学生や教員で行われる可能性が示唆された。本研究で取り上げる事例では、「暴挙」（平光,2001）といった批判がなされているが、仮にそれが暴挙だとしても、そのような暴挙は決して特殊な意思決定ではない。確かに、このケースでは事前に雨の場合の明確なプログラムを考えていなかった点、森林組合の中止決定を無視して計画を実行した点には問題がある。しかしながら、落石が雨晴れに関わらずに起こるものであることを考えれば（村越、2002、p.65）事故は雨でなくても発生した可能性がある。逆に、今回の調査の中でも、現場では天候が怪しいときに様子を見ながら実施するケースもあると指摘した対象

者がいた。また、雨の中でも程度を見極めて活動を実施することで、かえって思い出深い活動になることもあると言う教員もいた。「雨の中でのハイキングは危険であり、だからそれを決行したのは暴挙」という評価は、短絡的であろう。一般に航空機の事故調査では、事故の直接的な要因がパイロットの人為的なミスにあっても、そのミスを生んだ背景やハードウェアの問題をも含めて事故究明を行う。人為的なミスを道徳的に攻撃するだけでは、なんの効果も生まれない(村上、1999)という認識があるからである。こうした安全学の視点からも、事故の原因をこのケースの特殊な「暴挙」と考えてしまうことは、問題の本質を看過し、将来的に事故を防ぐことにつながるアプローチを隠蔽してしまう危険性すらある。

5. 結論

本研究では、自然体験活動での事故事例を素材として、同様の場面で学生や教員がどのような意思決定を下すかを検討した。その結果、学生・教員ともに、その教育的意義から、危険は認めるものの、自然体験活動を積極的に実施すると判断する傾向にあった。体験活動における危機管理は、こうした判断の傾向を考慮においてなされる必要があると考えられる。

参考文献

- 平光 正則 (2001) 危険通告を無視して強行した中学校野外キャンプの死亡事故
(URL:www.sportsnet-japan.com/Safety/Topics/Jikenbo/20020903-101104.html)
- 伊藤 堯・佐藤 孝司 (1995) 増補改訂版 体育・スポーツ事故判例の研究 道と書院
- 井上 透 (1999) 「自然体験活動中の安全に関する調査」からみた安全に関する配慮事項と視点 野外安全対策研究会・国立オリンピック記念青少年総合センター(編) 自然体験活動中の安全対策 野外安全対策研究会・国立オリンピック記念青少年総合センター
- 村上陽一郎 (1999) 安全学 青土社
- 村越 真 (2002) 子どもたちには危険がいっぱい 山と溪谷社
- 日本体育・学校健康センター (1999) 学校の管理下の災害 17-基本統計- (負傷・疾病の概況) 日本体育・学校健康センター
- 日本体育・学校健康センター (2000) 学校の管理下の死亡・障害 平成11年度版 日本体育・学校健康センター
- 下村 哲夫(編) (1997) 事典学校の危機管理 教育出版

資料1：板取村落石事故の概要（村越,2002）

この事故は東海地方が梅雨入りした6月5日の翌6日に発生した。事故にあったのは、春日井市立西部中学校の2年生で、前日から2泊3日の予定で同村のキャンプ場「キャンプランド新板取」に野外活動に来ていた。あいにくの雨模様のため、初日も予定していたキャンプファイアが雨で中止となっていた。この日は、草木染め（38名）、そばうち（38名）、木工クラフト（24名）、その他に林業体験、農業体験、鱒釣り体験、燕山（板取村内にある標高1069mの山）登山、奥の院ハイキング、（板取川河原の）クリンアップボランティアなどの活動を行う予定だった。それらのプログラムは、岐阜県のグリーンパイロット事業によって地元の森林組合が提供するもので、それぞれ経験ある指導者がつくことになっていた。

前日の森林組合との打ち合わせでは、ハイキングは当日雨が降ったら中止すると申し合わせていた。実際6時から6時半の間に雨が降っていたので、森林組合の長屋係長は、自ら電話をして中止を申し入れていた。そば打ち、草木染め、木工クラフトは雨でもできたが、当日急にそれらの活動に生徒を移行させることはできず、当初から学校で考えていた五平餅づくり（35人）も実施できたので、結局150人ほどの活動が中止となってしまった。

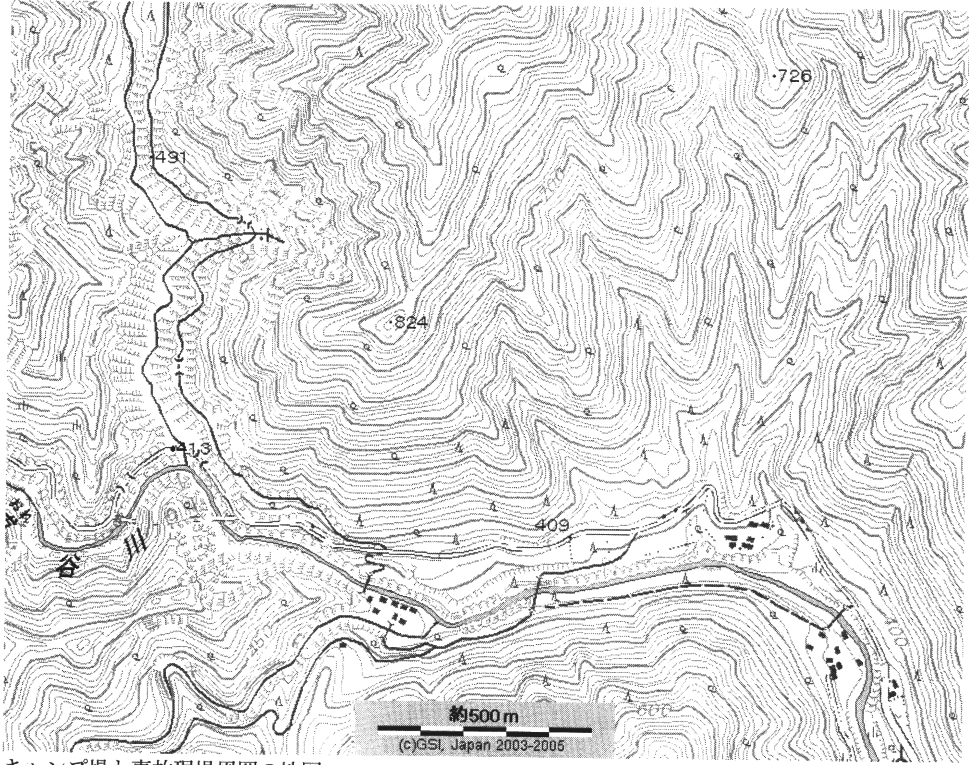
雨天時の対応は、1週間前の教員の会議でいくつか出ていたが、「せっかくだから屋外体験させたい」という意見が多数を占めた。登山は中止したが、林道を巡る奥の院ハイキングは距離を半分に縮め、不動の滝までいくことにし、そこに屋内での活動に参加できない生徒115人が参加することになった。この滝への道は、遊歩道として整備されている訳ではないが、「滝までは平らな舗装道路だし、去年もハイキングをした。生徒も楽しみにしていた」というのが判断の理由であった。また、このコースは、板取・新板取キャンプ場のハイキングコース見取り図には出ていた。

ハイキングは9時ごろ、生徒106人と引率教師5名で出発した。生徒は列を作って進み、教師は先頭と最後尾に2名ずつ、ほかの1名は列の中を歩いた。雨は降っていたが、生徒はジャージに雨がっぱをきたり、傘を差したりして歩いた。林道の入り口から15分。列の先頭が滝から引き返し始めた時、落石が発生した。10時半ごろの出来事だった。

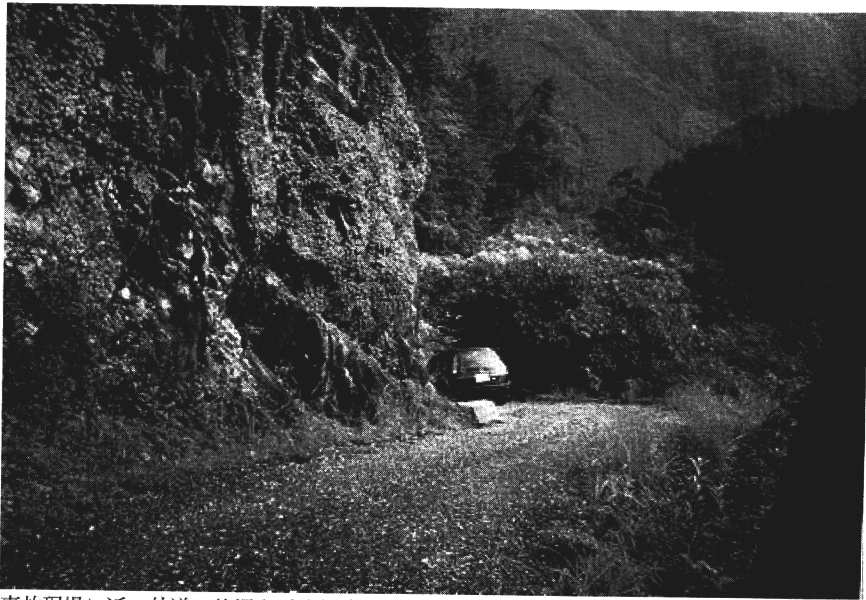
現場は、板取川に注ぐ海ノ溝洞と呼ばれる深い谷の支流に沿った林道上で、舗装された車道から1kmほど入った場所である。山側は掘削されたそのままの岩盤が剥き出しの法（のり）面が続く。写真で見るとおり、その傾斜は見た目にはほとんど垂直である。また谷側は、急な崖が続くがガードレールもない。覗き込むのさえ怖い。また林道のところどころには、この法面から落ちた石が散らばっていた。

死亡した2年生のT君は列の真ん中を歩いていた。うしろにいた男子生徒は「雷のような音がして、先生が「危ない」と叫ぶ声が聞こえた。真上を見ると大きな岩が落ちてきた。T君の右の耳付近に直接あたって、逃げるひまもなかった」「最初に小さい石が落ちてきた。その後、大きな石が落ちてきて、T君にあたった」現場では高さ20mほどある斜面の最上部から縦1.5m、横60cm、厚さ30cmほどの岩盤が剥離して崩落が起こっていた。T君が死亡したほか、生徒8人が怪我をした。

資料2：提示された写真と地図



キャンプ場と事故現場周囲の地図



事故現場に近い林道の状況を示す写真